

シンデレラたちと—— 短編集——

テコノリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一話完結で様々なアイドルたちを描いていく物語。

基本ラブコメ。ラブがないものも混ざる予定。

酷評されると凹るので合わなかつたらブラウザバックしてください。

※超ウルトラグレートスーパーなまらめちゃんこ不定期更新!!

目次

褪せぬ恋心 〈川島瑞樹〉

強烈な毒を恋と呼ぶ 〈新田美波〉

25

1

褪せぬ恋心 〈川島瑞樹〉

『別れないか』

目の前にいる恋人は、驚きながらもこう言われるのがわかつていたような表情をした。

諦観を意味したであろう微笑み。胸が締め付けられた。それと同時に別れの決心がついてしまった。

『いる場所が違うようになつて、お前と過ごしにくくなつた。努力はしているが、時間が掛かる。これ以上、お前の大事なものを奪いたくない。ものすごく勝手な理由なのはわかっている。すまない。別れてくれないか』

『本当に、勝手すぎますよ』

『すまない』

そいつはそれ以上俺を責めなかつた。

優しく、美しく。年下の高校生とは思えないほど、彼女はあまりに素敵な女性だつた。もう少し子どもでいてくれたら。美しさを好いておきながら、そう願ってしまうことが幾度もある。

『俺はこんな風に、こんなどうしようもなく勝手な理由で別れを提案するような、救い難い奴だから、もつといい奴と逢ってくれ。俺がそんな奴になれるまでの時間を、無駄に使わせたくない。もつといい奴とか、お前自身のために使ってくれ』

『……先輩』

『ん?』

『好きです』

『俺もお前が好きだ』

『だから、お終いなんですね』

『ああ』

*

「先輩と一緒にお酒を飲む日が来るなんて、思ってませんでした」

「そうだな。まさか川島が飲兵衛になつていたとは」

「もう。嗜んでるだけですよ」

「そうか」

焼酎を飲みながら、こつそり対面の女性の顔を眺める。

昔から美人系の顔立ちだつたが、十年経つて更に綺麗になつたもんだ。見られる商売をしているというのもあるだろうが、やはり本人の資質は大きいように感じる。

川島瑞樹。地方局アナから人気アイドルという華々しい経歴を持つコイツと、平凡なサラリーマンである俺が、何故アルコール付きで一緒に食事をしているのか。

ことは数時間前に遡る。

「えー、先日も連絡があつたように、今日から三か月間、我が社のオフィスを使ってドラマの撮影が行われる。いつもと勝手が違うことがあると思うが、気にせず自分の仕事に

集中するように」

以上のようなことが今朝の朝礼で上司から言われた。これでなんとなく事情はわかるだろう。そのドラマのキヤストに川島がいたのだ。

ここで会つたのも何かの縁。といった感じで休憩時間に声を掛けた。

川島に声を掛けたのはファンだからということではなく（応援しているのは事実なので否定しきれないが）、単純に知り合いだつたからである。

「川島」

「先輩？」

すぐにわかってくれたのは結構嬉しかつた。まあ、俺の少し癖のある緋色の髪は特徴的か。

会話がしやすいところまで物理的に距離を縮める。川島は昔と違つてヒールを履いているのに、身長差はほとんど変わつていない。俺の身長が伸びたのだろう。

「お久しぶりです。十年ぶりですよね」

「もうそんなになるか。俺の方は、そんな久しぶりって感じしないんだけどな」

「あら。いつも応援ありがとうございます」

「おう。感謝しろ感謝しろー」

てきどーに返すと笑われた。川島がおかしそうに笑う様子に、どこか安堵する。

久しぶりに会つて積もる話がある。適度に話が弾んだが、ここで話しきれることではなかつた。もしよければ今度食事でも、と言ふと、なんと即日OK。川島だけでなく、川島のプロデューサーも快諾してくれた。

そうして今に至る——というわけだ。

「お互いいい年齢トシですけど、先輩はお相手いたりしますか？」

「いる奴がお前のこと飯に誘うかよ。お前こそどうなんだ」

「いる人は男性とのサシ飲みにホイホイ来ませんよ？」

コイツもサシ飲みという言葉を使うようになつたか……。十年とは、意外と大きい。今更だが、恋人の有無以前に今の状況は如何なもんだろうか。プロデューサーが許可をくれたとはいえた。

川島にその旨を問い合わせると、

「プロデューサー君がOK出してくれたんですもの。心配しないでください。そもそも

うちのプロダクションは恋愛自由ですし」

アイドルと言えば恋愛禁止のイメージがあるが、事務所それぞれということか。あの伝説のアイドルだって、現在旦那となつた人が好きだと引退前から知られていた。つま

りは事務所ごとのスタンスや、アイドル自身のファンへの向き合い方なんだろう。

「成程。お前に相手がいないのは職業の所為ではないんだな」

「先輩のそういう所、嫌いです」

「でも嫌いじゃないだろ?」

「まあ、そうですけど……」

川島は僅かに頬を赤く染める。なんだか俺まで恥ずかしくなってきた。顔をパタパタと手で扇ぐ。

あー。話題を変えよう。

「そうだ。テレビ、見てるぞ。大活躍だな」

「あ、ありがとうございます。まだまだ若い子には負けませんよ」

ウインクが様になるんだよな、コイツ。

にしても、どうしてコイツは自分より十は歳下の子たちと若さで張り合おうとするんだろうか。大人の魅力とやらで攻める方がいいと思うんだが。若い子と同じ土俵でやろうとしているのは、それはそれでかわいいけど。

ちらりと時間を確認すると、結構いい時間になっていた。思ったよりも話し込んでしまつたらしい。思い返せばそれなりの量の酒を飲んでいた。日付が変わるまで残り一時間を見る頃になるわけだ。

「そろそろ出るか」

ジャケットを羽織る前に伝票を取つておく。あまりリーズナブルとは言えないが払えないことはない。幸いにして給料日直後だ。

川島と食事ということで普段はあまり使わない個室居酒屋に来てみたら、意外とするもんだ。個室ということでその分金が掛かっているらしい。

「川島。財布を仕舞え」

「そういうわけにはいきません」

「いくんだけよ」

念の為見てみれば案の定だ。奢られて当然と思うタイプよりはマシな気がするが、さてどう折り合いをつけさせようか。

「学生の頃は割り勘だつたじゃないですか」

「あの頃はお互い金がなかつたからな。今は違う」

「今はお互いお金があるじゃないですか」

お互いの金銭状況が同程度なら割り勘つてか。正直絶対コイツの方が稼いでるんだよなあ。年収、俺の何倍だろう。

男女で食事の際は男が払うべし。なんて思つていながら、なんか、川島にも払つてもらうのはカッコ悪いじゃないか。他人様に価値観を強制する気はない。俺がそう考え

るというだけだ。

伝票を渡さないように躲しながら方法を探る。

「じゃあ等価交換だ。お前の今の連絡先教えてくれ」

「連絡先ですか？」

「こんな金額じやまつたく価値が釣り合わないのはわかってるが、川島瑞樹の連絡先なんて、一般人からしたら相当の値打ちもんだ。だから、それでどうだ。気に食わないんだつたら、また一緒にどつか行こう。それで少しずつ清算していくつていうので」

酔つ払つて変なことを言つている自覚はある。要約すると何を言おうとしているかもわかつてしまう。表には出ていないと思うが、かなりパニクつている。

川島もなんかポカンとしている。一気に酔いが醒めた。

「すまん調子乗つた。忘れてくれ」

会計に向かおうとすると腕をつかまれた。まだ食い下がる氣かコイツは。

「先輩がいいなら、それでお願いします」

「ん」

答えて、足早にレジへ向かつた。閉店時間が近付いてるので店を出ることを優先する。柔らかく微笑む表情。俺は昔から川島のその顔が苦手だ。少しの間顔を背けたくなるから。

店の外に出てから連絡先を交換した。昔は当然ガラケーだつたな、と思いつ出す。
川島をタクシーに乗せてから、一人駅に向かつて歩き出した。

「やっぱ、いい女だなあ」

大物を逃したとは思つていた。二度と遭遇しないだろうとも。だがあれだけの大物になつて再び現れた。

勝手な理由で手放した俺が、もう一度と願つてしまつてもいいのだろうか。

後日、休みが重なつたタイミングでショッピングモールへ出かけることとなつた。

新装開店から数か月。ずっと気になつていたものの、人が多いことと友人となかなか休みが合わないことから来れなかつたらしい。一人で訪れるという選択肢はなかつたのだろうか。まあ、誰かとわいわい買い物がしたかったのだろう。女性はそんなもんだといふイメージがある。

「川島、少し休ませてくれ……」

「体力なきすぎですよ、先輩」

「おっさんと現役アイドルの体力を比べるな」

女性の買い物につき合う経験は何度はあるが、どうも疲れてしまう。昔の川島はもう少し配慮してくれた気がするんだがなあ。

まあ、川島が楽しそうにしているならこれもいいか。俺が食らいつけばいいだけだな。でも一旦休ませてくれ。マジで。

川島に連れられてフードコートの椅子でぐつたりしていると、いつの間にか一人になっていた。川島どこ行つた?

「せーんぱいっ」

「つ！」

首筋に冷たいものが当たられる。お前、またベタなことを……。こういうのは若い子がやるからいいのであって、アラサーがやることじやないだろ。普通に嫌がらせだわ。川島だからいいけど。

「どうです? 運動部の後輩っぽくやつてみました」

「お前放送部の後輩だろ」

俺の首筋に当てられたのは、少し前にまたブームが訪れたタピオカドリンク。もう何度も目のブームかね。俺らが学生の頃にも流行つてた気がする。

「先輩も飲みますか？」

「いやいい。どうせ買ってないんだろう？」

「先輩はいるなって言うと思ってましたから。その代わりに、お水です」「あー、こいつはおありがたい」

フードコートで無料で提供されている水を半分ほど一気に呷った。体に染み渡るな
あ。

川島はタピオカをもつきゅもつきゅと食べている……タピオカって食べ物か飲み物
かいまいち判別しづらいな。

そういえば、昔はタピオカを飲み込むタイミングが掴めなくて苦戦してたな。
「今はちゃんと食えるか？」

口に含んでいた分をこれ見よがしに飲み込んだ。それからちよつとだけ怒ったよう
に言われる。

「もう、いつの頃の話してるんですか」

「悪い悪い」

美人な大人の女性になつていても、子供っぽい動作が合うのはズルいと思う。俺の扱
い方でもあるんだろうか。いつまで経つても俺にとつて川島は歳下の女の子なんだよ
な。

スッと飲み口が向けられる。見れば川島が少しだけいたずらっぽい顔をしていた。

「先輩も飲みますか？」

「じゃあ一口貰う」

タピオ力を口に入れられるようにストローを動かしてから咥えて啜った。

煙草の径よりも大きめのストロー。専用感が凄まじいな。他にこの大きさのストロー使うことないだろ。知らんけど。

「どーも」

川島がなんだか悔しそうな顔をしている。悪いな。俺はこんなことで動搖するタイプじやない。というか29にもなつて間接キスぐらいで動搖するはずないだろ。拗らせ童貞でもあるまいし。

「私の分も飲んだんですから、バシバシ買い物付き合ってくださいね？」
「飲ませたのお前だろ」

たつた一口でそこまで言うか。徳用チヨコ一粒食べただらいのもんだろ。いい性格してるな、まつたく。

ここまで行程で何度か使つた、モールのパンフレットを見せてくる。パンフレットと/or>いうか、单なるフロアマップだ。

マップを見ながら行きたい店を指折り数えている。……休憩前より多くないか？

「お前、遠慮つて言葉知つてるか」

「今休憩取つてるじゃないですか」

本当にいい性格になつたな、おい。

本気で言つていなかつてはわかっているから、別に腹が立つことはない。

「変わつたな、お前。昔よりなんか、ずうずうしい」

ずうずうしい。遠慮がない。相手を気にしない。悪い言葉のように聞こえるが、そんなもの、人との関係性によつていくらでも変わる。

「今の方がいい」

高校の頃。俺と川島が恋人関係にあつた頃は、もつと俺に対する遠慮が強かつた。

きっと、今よりも先輩後輩の感覚が強かつたことと、交際のきつかけが川島からだつたことに由来していたのだろう。

付き合つていく中で徐々に我を出してくれていた。それでも今には及ばない。遠慮があつた頃よりも、十年越しの今の方が甘えられている気がする。付き合つていなければ。

「痛つ」

脛を蹴られた。何故だ。ちなみに痛がつたのは俺ではなく蹴つた方の川島である。実家の方針で急所を極力減らすべく努力をさせられた俺の脛は、それはもう硬くなつて

いる。

ぎりぎり聞こえしまったぐらいの小さな声で文句を言われた。

「先輩のばか……」

「蹴ることないだろ」

「なんで聞こえてるんですか」

「聞かれたくないなら声に出すな」

元アナウンサーで現アイドルなお前の声は通るんだよ。というか、俺がそそうお前の声を聞き逃すか。

フロアマップをくるりと回し、俺の方に向けてくる。

「先輩はどこか行きたいところありますか?」

少しわがままな今の方がいいと言つた俺への意趣返しだろうか。

このモールに来ると決まってから事前にリサーチしていたが、俺が行きたいような店は特になかった。買いたい物もそもそもない。強いて言えば、買い置きの煙草が切れそ うなぐらいか。だがそのぐらいコンビニで買える。

「別にないいな。川島が行きたいところに行くでいい」

「遠慮しなくてもいいんですよ?」

「どころがどっこい、欠片もしてない」

「それ、今日日聞きませんよ」

「うるさいな」

通じるんだからいいだろ。会社の若い子相手だと通じない言葉もあつて氣を遣うんだから、同年代と話すときぐらい氣を抜かせろ。

川島はカップに残っていたドリンクを飲み干し、お優しい後輩の厚意を無碍にしてしまつた俺へ、意気揚々と告げた。

「私が行きたいお店へ連れ回しますから、覚悟してくださいね？」

「はいはい、わかつたわかつた」

俺は美人が覚悟しろと言う表情が大好きな人間である。惚れている相手なら、尚更。

川島が後半戦で行きたかった店とは、俺を連れて行きたかった店らしかつた。アパレルショップ、ファッショングoods店、小洒落た生活雑貨店で、それはもう生き生きとした表情をしていた。川島自身の買い物よりも、かもしだい。

友人と来れなかつたから俺を誘つたというのは事実と異なるのではないか、という無粹な詮索は止めておこう。

無粹ついでに言つておくと、訪れたある店の店員が俺たちを恋人同士だと勘違いして話しかけてきた。容姿を見れば俺と川島は明らかに釣り合つていない。川島が変装し

ていてもだ。だというのに何故勘違いしたのか。俺の左手と川島の右手が何よりの証拠だつたことは、長々と語つておきながら完全に余談だろう。

「憧れの先輩とのデートはどうだつたの？」瑞樹ちゃん

「で、デートじゃないわよ。一緒にショッピングモールに行つただけなんだから」

「それをデートって言うんでしょ？」付き合つてないからデートじやない、とか高校生みたいなこと言つてるんじやないわよ」

連絡アプリのやりとり内でも当日の会話でも、お互い一度もデートという単語を出していない。一緒に飲んでいた片桐早苗の言葉を否定する材料はこの通りあつた。しかし、途中から自然と繋いでいた手の感触を思い出すと途端に否定できなくなる。

「早苗さん、瑞樹さんから面白そなこと聞きました？」

「まだ全然聞けてないけど……見て。何かを思い出して一人で赤くなつてるわ」

「なんかあつたんすか？ その先輩と」

「何かあつたつて程じやないんだけどね。その、途中から手を繋いでたことを思い出して……」

「うつきや。瑞樹さん、オ・ト・メ☆」

瑞樹の他に、早苗、心など多数の成人済みアイドルが足?く通う居酒屋は、お酒や食事の充実具合と反比例してアイドル以外の客がいないので佐藤が静かにしていなくても何ら問題はない。

心ははしやぎ、他の客（アイドル）は微笑ましそうにし、早苗は「えほつ」とむせていた。同じ年の女性が高校生どころか中学生のような恋路を歩んでいる姿を目の当たりにしたせいである。

「瑞樹さんは、瑞樹さんを虜にする方のどんなところ所ところが好きなんですか？」

「ちよつと今のは、強引だつたかな」

レイ・ディスタンスの相方が披露した強引なダジャレにもツッコまず、瑞樹は先輩の姿を脳裏に浮かべた。

彼の好きなところはいくらでも挙げられるが、どんな順番でどれだけ言おうか。ほどよくアルコールを入れた脳が回る。

色々言つたところで彼女らは先輩を知らないし、何より（自分で言うかと思うが）先輩は多分私が好きだ。先輩の魅力を存分に語つてみよう。

「言つちやええば全部好きなんだけど、好きになつたのは声が最初ね。暖かくて優しくて、凄く落ち着く声。でもちよつとだけ荒っぽいというか、やんちゃさがあつて。校内放送で初めて先輩の声を聞いたときから、ずっと好きなの」

「瑞樹ちゃんは先輩目当てで放送部に入つたつてこと?」

「先輩がいなくとも入つてたわよ。私、元アナウンサーよ?」

彼目当てで入部したらそのまま放送関係に興味を持った、というのも可能性としては存在するが、事実と反する事柄である。

「最初に好きになつたのが声で、次に好きになつたのは?」

「背中ね」

「背中、ですか?」

先輩を好きになつたプロセスのうち、最初の数個は鮮明に覚えている。好意を自覚する前で、パートが好きなのだと思つていた頃があつたから。恋をしているとわかつてからは、好きだと感じる箇所が雪崩のように押し寄せてきたからいちいち覚えていない。

「今はいくらか伸びてたけど、昔は身長小さめだつたのよ。ギリギリ170センチないぐらい。でも仕事してると後の姿とか見たら意外と肩幅しつかりしてるし、背中も広くて、男の人なんだなって。それが身長との、ギャップ萌え? つて感じだつたわ」

酒の肴にするにも甘すぎる話しぶりで悶絶する大人たちがそこにいたとか。

これが完全に終わつた恋の話であればまだ苦さが滲んでいただろう。だがこれは今再び動き出している恋である。故に、榎原里美が食べるパンケーキのような甘さに仕上がつてしまつた。

「瑞樹さん、もう少しお話しを伺つてもいいですか？」

「嘘だろ美優ちゃん、まだいけんの？」

「？　はい。瑞樹さんがとても幸せそうに話されていますから。あ、でも皆さんは……」

甘さで満身創痍＆それを誤魔化すために飲みまくつたせいでへべれけ状態である。順番を覚えているのもあと一つ。周囲の反応はあまり予想していなかつたものになつたが、瑞樹にとつてもキリがいいタイミングだつた。

「じゃあもう一つだけね。指先がちゃんと整えられてたの。結構しつかりしてた手なんだけど、爪だけは整えられた丸い爪でね。可愛いなつて思つたの」

「男への可愛いはアウトよ瑞樹ちゃん！」

可愛いは最強。可愛いの前で人は無力。そこに陥つた瑞樹が件の先輩にベタ惚れであることは、誰の目から見ても火を見るよりも明らかだつた。

瑞樹と先輩が早く結ばれますように。店内にいた一同、胸焼けしながらそう願つた。

「無用心にも程があるぞ、お前」

更に後日。晩飯に誘われたはずが、現在地は川島の住むマンションの一室である。俺が住んでいるアパートと比べてはいけないほどに広い。整頓されていることもあるだろうが、そもそも小綺麗なつくりであるのがわかる。

「あら。芸能界に身を置いているんですから、人を見る目には自信がありますよ。私は先輩のこと信用してますから」

「男を見る目はなさそうだがな」

「そんなこと言つてるとご飯作つてあげませんよ」

「その場合俺は帰るだけなんだが」

この時間をふいにすることが惜しいのは事実だ。だが別に今回しかないわけでもない。

「思つてはいるが、キッチンから一升瓶を出して見せてきた。

「お前、酒はするいだろ」

しかも俺の好きな酒だ。いつだつたか飲んでいる時にポロツと言つた気がする。

「どうしますか？」

楽しそうに尋ねるなあ。

溜息を一つついた。

「何か手伝うことはあるか？」

「先輩は座つて待つてください」

「はいはい」

ソファに腰掛けて待つだけの時間を過ごしているのは落ち着かなかつた。だがそれよりも、この状況自体を見つめ直した方が落ち着かなくなつた。

度数は低くてもいい。何か酒を飲ませてくれないだろうか。そうすれば、落ち着かない気持ちの所以を誤魔化せるのに。

後から知つたことだが、このシチュエーションを作り出した川島の側も、緊張しながら過ごしていたらしい。

食事を終え、作つてもらつたつまみと共に飲み交わす。手土産で持つてきたスーパーの安酒と、俺へのエサとなつた酒。どちらもそれほど度数が高くないので一向に酔えない。

自分の体質を恨みつつ、義を欠く言い訳が出来ないだけだと前向きに捉えることにした。

始めは対面にいたはずの川島が、いつの間にか隣で俺にもたれている。

「先輩……」

「眠いならベッドで寝ろ。俺は帰るから」「ムードって知っています?」

「やり口があざといんだよ」

「何度も一緒に飲んでるんだ。酒量は知ってる。まだ酔つ払うほど飲んでないだろう。流石西の女と言ったところか。コイツも酒強いんだよな。」

「先輩、明日お仕事は?」

「運よくホワイト企業に就職できたからな。完全週休二日制だ」

今日はプレミアムではない金曜日。愛読している、仕事×お酒なマンガの更新日なので、俺にとつては毎週金曜がプレミアムである。

尋ねられたので、視線で尋ね返して見る。お前は?

「私も明日は仕事が午後からなんです。だから、よければ泊まっていきませんか?」「泊まらない。良いわけあるか馬鹿」

含むところなく異性相手に泊まりを提案する奴じやない。あのな、順序つてものがあ

るだろう。順序なんてものを重視してしまうあたり、家の奴らからの影響を受けている
と感じる。

服の二の腕あたりをギュッと掴まる。体が軽く右に傾いた。

「考えなしには言つてません」

わかつてる。

「なんでそんなに俺のこと好きなんだ?」

勝手な理由で別れを告げた俺のことを、最後まで好きでいてくれて、再会してからも
また好きになつてくれて。尋ねずにはいられなかつた。

「だつて、仕方ないじやないですか。嫌い合つて別れたのでも、気持ちが冷めて別れたの
でもないんですから。先輩にばつかり都合のいい理由だつたけど、それでも、とても優
しかつた。十年越しに逢つても、先輩は全然変わつていなくて。私が好きになつた時と
同じ。ううん。ちょっとおじさんになつた今の方が好きです」

おじさんは余計だ。

川島の言葉が少し切れた隙に、身体の正面を川島に向ける。

「先輩のことが好きです。私と付き合つてくれませんか?」

昔と一言一句違わぬ言葉だつた。俺は少し変えて返した。

「俺?」

「はい」

川島の手を取った。ここからは昔と違う。

「俺は結構どうしようもない奴だけど、今度は努力する。もう二度と手放さない。だから、結婚を前提に、俺と付き合ってくれないか？」

柔らかく微笑まれる。俺の顔が赤くなってしまうので、いつもはまじまじと見れない表情。

「先に申し込んだのは私ですよ?」

「結婚を引き合いに出したのは俺が先だ」

「もう」

取つていてる手が一瞬クンと引かれた。

手を引いて顔を近づける。川島の瞳が閉じられた。

十年ぶり二度目の交際は、ほんのリアルコールが香るキスから始まつた。

強烈な毒を恋と呼ぶ 〈新田美波〉

休日とは思えない時間にセツトした目覚まし時計がけたたましく鳴った。

昨夜は眠りにつけるか甚だ心配であつたが、どうやら緊張よりも睡魔が勝つたらしい。しかしその戦いは拮抗していたようだ。瞼は重く、薄い掛け布団の僅かな温もりに身を委ねたくて仕方がない。

だが今日これから出来事を思えば、強制的に意識が覚醒する。愛玩動物のようにぶるぶると頭を振り、首やら肩やらを回したり伸ばしたりする。バキボキコキリと穏やかではない音がするが、インドア大学生にとつてはいつものことだ。

枕元に置いてある眼鏡ケースから中身を取り出して装着。それからカーテンを開ければ、高威力の日差しが刺さる。

予報通り今日は暑くなりそうだ。サンサンと煌く太陽が本日もたらすは、カラリとした夏の一日。

絶好のデート日和だ。

今日の目的地である水族館に向かうため、普段は使わないバスに乗った。

バスに揺られる時間は幾ばくかある。今日やらなければいけないことへの覚悟を決めつつ、今日の相手に初めて出会つた日を思い出していた。

大学の講義開始前の騒ついた時間。受講生が多いため、空きの少ない座席。不意に掛けられた可憐かつ美麗な声。

断片的に思い出すだけでも頬が緩んでしまう。無理矢理頬杖をついてニヤけた顔を他人に晒さないようにした。それから彼女に恋をした瞬間を反芻し直す。

その時間、僕は友人と連れ立つていなかつたため隣の座席は空いていた。受講生の人数と教室の収容人数がほぼイコールであれば見知らぬ者同士で相席なんてザラだ。だから「お隣、いいですか?」という声への返事がおざなりになつた。

雑に、どうぞなんて言つて、何気なく相手の顔を見た。これは声を掛けてきた人が男だろうが女だろうがやつていたと思う。理由はどうあれ、自分に意識を向けてきた人が気になるのは、人間の性じやないかな?

そうするとそこには、とびきりの美人がいた。一生に一度、お目にかかるかどうかかつてレベルの美人だ。

理屈は一切抜き。本能でわかつた。僕はこの人に恋をしたのだと。

いわゆる一目惚れというやつだった。名前も学年も学部もわからぬ相手だつたが、そんなものは関係ない。彼女に惚れたという事実があり、日ごとに増す想いを抱えてい

る。

僕がその人の名前を知ったのは家でテレビを見ていたときだつた。人気真っ只中のアイドル、新田美波。高嶺の花にも程がある。

それでも惚れてしまつたのだ。恋と言う名の毒が解けることなく全身を回る。しかも強烈な毒が仕込まれたのは学年が違うにも関わらず、その一度きりではなかつた。僕が所属している新聞会での取材に始まり、顔を覚えてもらつたことで話せる機会が大幅に上昇した。その都度美波さんの魅力に触れ、更に精神を支配されていつた。

あの日から一年と少し。美波さんと少しずつ距離を詰めることに成功した僕は、こうして休みの日に二人で水族館に出かけられるようになつた。まあ、二人きりで出掛けるのは今日が初めてなんだけど。

男女が二人きりで水族館。これはもう告白する絶好の機会に他ならない。心臓が張り裂けそうな思いをしながら、今日こそ美波さんに告白しようとした。

決意は固い。今更日和つたりなんかしない。でも緊張ヤバい。いやそんなこと考えてる場合じやないんだ。いやいやそんなことつてことはないだろう。それでもまずは今日のデートそのものを成功させなくてはいけない。そうだよ、まずはそれだよそれ。ちゃんと準備して臨むデートなんていつぶりだろう。高校の時の彼女は、なんかもうダラダラとショッピングモール行つてただけだしなあ。田舎で他にデートっぽいこと

が出来る所が無かつただけなんだけど。

東京、コワイ。デートスポットの選定からふるいに掛けられている気分になる。うーん、今更足搔いても仕方ないか。美波さんも楽しみにしてくれてる、と信じよう。お父さんの影響で海関係に興味あるって言つてたから、多分大丈夫だよね？

無駄に頭を使つていたところ、車内アナウンスが耳に入る。僕が降りるバス停だ。

左手首に巻いた腕時計に目線を落とす。待ち合わせの時間よりだいぶ早い。なるべくソワソワを我慢してから家を出たつもりなんだけどな。でもこの炎天下に美波さんを待たせるよりマシだよね。うん、そういうことにしよう。

チヤリンチヤリンと乗車賃を支払い、目を細めながら外に出る。まつぶし。こりやビタミンD大量につくられるな。

バス停と水族館はそれほど離れていない。ていうか超近い。ふつと目を向けると、こちらに向かって手を振っている人がいた。基本的にそんなことをしてくれる人に縁がない。同じバス停で降りた、僕以外の人が対象だろう。

と、ぼつち脳が考えるより先に判断を下したが、それは大きな間違いだと視覚情報が訴える。

嘘でしょ。時間よりまだ早いのに。

僕は一目散に走りだした。視線は右手を振っているあの人にクギ付けだ。

美波さんも、僕とのデートを楽しみにしてくれてたのかな。なんて、バカみたいな妄想をしてみる。こんな風に浮かれるくらい、既にワクワクが止まらなかつた。

「早いですね、美波さん」

息を切らしながら話しかける。

僕が何も言わなかつたら、美波さんはきつと僕の呼吸が整うのを待つてくれていたらう。でも折角一緒にいるんだ。死にそうな目に遭つてるわけでもないし、話したい。「遅れちゃいけないと思つたら、早く着きすぎちやつた。野崎くんだつてまだ時間前だよ? 走らなくてもよかつたのに」

「早く、会いたかつたから」

「ふふっ、ありがとう」

恋愛偏差値低めのシャイボーリーが出来る精一杯のアピールもさらつと流される。傷ついてなんかないんだからね……。いつものこと過ぎて……。

「それに僕から誘つた手前、あんまりお待たせするわけにもいきませんから」「優しいね。それに律義で……、真面目?」

「そつくりそのままお返しします」

ふ一つと大きく息を吐く。うん、息も整つてきた。

僕の様子を見て、美波さんが声を掛けてくれる。

「そろそろ中に入りましょうか」

「はい」

横目で様子を窺いながらそつと歩調を合わせる。女性にしては身長が高い人だと思つていたけれど、意識して歩いてみると僕よりも小柄な異性の身体つきだと改めて感じた。

なんか今、僕の方がリードされてない?

このままで告白なんかできるのか。告白自体は出来たとしても、もうちょっとこう、かつこよくて頼れる所を見せておいた方が……。いや、今更何言つてるんだ感が凄いな。僕、そういうとこ本当にどうしようもないんだった……。

二人並んで巨大な水槽を見ていつた。ウミガメ、エイ、サバ、クラゲ、エトセトラエトセトラ……。

ぽけ一つと眺めている僕とは対照的に、美波さんは楽しそうだった。

美波さんが楽しんでるならなんでもいいや。なんて格好でいたら、魚たちの知識に乏しい僕のために解説ボードにも載つていらないような知識や雑学を踏まえて逐一解説してくれた。女神かな? 女神だね。

ウミガメは産卵の時に涙っぽいものを流すけど実際はただの塩水を垂れ流しているだけだと、日本でよく見る鰐はスズキ目、サバ亜目、サバ科、サバ属、マサバというなんともサバサバした分類だと、キクラゲはきのこだけど中華クラゲは本当にクラゲだと。元々無駄な雑学を多く知っているつもりだつたけど、興味があつて知識を蓄えている人にはやっぱり敵わない。

美波さんとデートということで非常に浮足立つて、水槽の中身をほとんど見られていなかつた。けれど一生懸命に僕へ話してくれるものだから、すっかり満喫してしまつた。

同じものを見て、少し話して、一緒に楽しむ。文字に起こしてしまえば結構普通のことだけど、これだけのことが僕は凄く幸せで、胸がキューッと締め付けられる感覚がした。

好きだなあ、と口の中だけで呟く。一度もちゃんと伝えられていない想い。

受け入れてくれるならば、僕が貴女から貰つた沢山の幸せを、僕が貴女に一番返せる存在になりたい。

「もう少しでイルカショーや始まるみたいですが、見ていきますか?」

「せつかくだし見ていきたいかな。野崎くんもいい?」

「もちろん。駄目だつたら提案してませんよ」

水族館のイベントと言えばほぼイコールでイルカショードが浮かぶ人は多いみたいだ。開始直前に来たわけではないのに、観覧客の席は既に六割が埋まっていた。

前方の席は空いているが、念のため避けておいた方が良さそうだ。一分ほどキヨロキヨロした結果、中段の端つこの席を確保できた。

辺鄙な席だけど、そもそも人が多いので必然的に美波さんとの物理的距離が近くなる。心臓爆発しそう。

「そういえば、アレって本当にあるのかな？ そこのカツプルさんってお客様を指名するの」

「どうなんでしょう。普通に考えて、ないと思いますけど」

「その心は？」

「本当に仲睦まじいカツプルならいいですけど、そうとは限りませんから。例えば、ただの友人。きょうだい。友達以上恋人未満。偶々世間話をしていた赤の他人同士。偶然出会ってしまった会社の同僚。破局寸前ながら最後の思い出作りで来ていた擦れまりのカツプル……」

「なんでどんどん拗らせていくの!?」

「美波さんが大喜利風に訊くからつい」

「そんなつもりなかつたんだけどな」

本当はふざけた答えを考えるのが楽しくなっちゃつたからです。

美波さんは困り顔っぽいものを浮かべていたけれど、程なくして笑みが零れた。
眞面目に教えてくれてるのも困つてるのも笑つてるのも魅力的って、本当にズルいな
あ。

「野崎君はおもしろいね」

「僕そんなにひょうきん者ですか？」

「ううん、そうじゃないの。野崎くんといふと楽しいなあつて」

一瞬固まつてしまつた。それからパツとショーピールを向いた。いつもなら美波さんの言葉を無視するようなことは絶対にしない。

でも思わずそうしてしまつたのは、今の言葉がびっくりするくらい嬉しかつたから。
涙が出るんじやないかつてくらい。

「よかつた」

はらりと漏れた言葉は誰にも届かず、ショー開始のアナウンスにかき消された。

少しだけピールを見るのに苦労する角度だつたけど、イルカたちの活躍は見えていた。でも意識には全く入つてこなかつた。

原因はさつきの言葉。そしてそつとはしやいでいる美波さん。「わあ！」とか「すごい！」とか歓声を控えめに上げながら、始まる前よりもちよつとだけ身を乗り出して

シヨーを見ているのがかわいすぎて困る。

大人っぽいのに子供っぽいところとか、笑顔とか、優しいところとか、関わりが少なかつた後輩の名前をすぐに覚えてくれたところとか、最上級に嬉しい言葉をさらつとくれたりとか。素敵な所を見つける度に毒を打ち込まれる。

その毒は僕に美波さんのことばかり考えさせてしまう。今のように。
ああ。好きです。

『——が来場いただきありがとうございました』

アナウンスと周囲の拍手で我に返る。結局イルカは見てるだけだつたな。何一つ記憶はない。意識はずつと美波さんだけに向かつていた。

「はあ。楽しかったね」

「そうですね。かわいいかつたです」

「うんうん。イルカってかわいいし頭良いし、すごいよね」
あ、違う。かわいかつたのは美波さん。イルカがかわいかつたつてことで誤魔化され
て欲しい。

「純粹！　かわいい！　でも適当に答えちゃつたから少しばかり心が痛い。

次の予定はどうしようかと考えようとするとき、僕の頭に美波さんの手が乗せられた。

「熱いね。大丈夫?」

「えつ、あ、はい。……なんで?」

驚きすぎて全く文章にならない。上手く回らない頭で言葉を絞り出す。

「あつ、ごめんね。なんだかボーッとしてるよう見えたから。中に入つてちょっと休もうか」

パツと手が離されると残念な気持ちに襲われる。おかげりが欲しい気持ちと、汗かいてるからあまり触つてほしくない気持ちがせめぎ合つて大渋滞。

立ち上がり何となく周りを見ると、辺りに人はほとんどいなかつた。炎天下の中、屋根のないここに長居したい人はそりやいない。
もしかして、今チャンスでは?

「野崎くん?」

動かない僕を気遣つて呼んでくれる。彼女の綺麗な琥珀色の瞳を見つめた。

「美波さん」

「どうしたの?」

いつも通りの柔軟な表情と声を返される。僕の心臓はこんなにも高鳴つているのに。「美波さんのことが好きです。ずっとと言えなかつたんですけど、前からホントは好きでした。僕と付き合つてください」

気温と緊張の影響で汗をびっしょりかいでいる。冷たいプールの中で泳いで跳んで。そんなイルカが羨ましい。

勢いのまま下を向いていた顔を恐る恐る上げる。頬を赤く染めた美波さんと目が逢つた。

「はい。よろしくお願ひします」

照れた様子で優しく頷いてた。

ぶわりと熱い風が吹いた。僕の心の中か、それとも僕たちの周りか。判断するには、頭も心も身体もあまりに暑かつた。